



紀行

關東五日の旅

高祖保

十一月十八日。

——走つた、走つた、汽車は走つた。

夜の驛に停つては走り、走つては停つた。

車窓一瞬、逃げゆく、すばやき闇と灯、灯と闇、影と影、

橋、河、空、山、消えゆく野また野……そして、それらの物

悲しき影像。とぶやうに走る汽車。

昭和二年十一月十八日午後九時二十二分彦根發東京行半急

行は、沿線の小驛を小石のごとく黙殺して一散した。——闇

をかいくぐり、影をぬけ、灯を遮り、地をすべり、河をとび
越え、森をしのぎ、夜寒の東海道を馬力をかけて、ひた走り
に走つた……。

十一月十九日。

曉、午前六時、蒲原の松並木を汽車は右手に瞥見して一散

する。松並木をすかして、東雲を映して濛らぐ黎明の海上へ

胡麻をばら撒いたやうに點々たる漁船。

ほのぼのと海上遙かに積堆した夜雲をおし開き、桃いろの

黎明の第一線が、燦として車窓を射る頃、私たちは車窓とほ

からず、雲表に靈姿を屹立する東海のまさしき「富士」を眺

めた。空は快晴であつた。快晴の玻璃もどきの青穹へ畫のま

ゝの富士の姿。寧蒙の曉色を肩に擔いですつきり立つた富士

自辨である。

正午同處を出て底倉を後に、坂路迂餘曲折、九十九に折れ

て強羅にいたる。萬山紅葉して、山氣既に蕭索たる晩秋であ

る。人の氣配なくひっそり閑たる山莊にも、秋は忘れずその

庭樹を紅葉に染めかへしてゐるか。あはれ、このゆかしさよ

話々たる石ころ道よ。

強羅にて小憩。繪葉書、杖等を購つて手間をとり、約十人

ケーブルカーに乗り遅れる。「千人風呂」のもの古りし掛札

も昔めかしく、葛西善藏の短篇をゆくりなくも思ひ起す。ケ

ーブルで一氣早雲山へ。

ケーブルカーを棄て一氣大涌谷へ遅れ馳せにひた上る。な

だらかなる全山、春苔のごとき幼樹、下方遙か映ゆる宮の下

底倉の紅葉。忽ち遊山氣分横溢。

私たちはやがて硫化水素水蒸氣の噴出する男性的な大涌谷

附近の光景のまのあたりに眺めた。一方は千仞の溪谷、徑道

の危かしさ、私たちの呼吸ははずみ、膚はじつとり汗ばみ、

顔色頓に紅潮を呈した。

大涌谷はどくどくと熱湯を沸騰させ、硫氣滾々鼻頭を劈き

宛ら別府血の池地獄を髣髴せしめる。佐藤先生のキヤラメル

の姿。燦然と輝く山嶺の銀雪、延々目路をかすめる大裾野原

を瞰下して秀麗皎潔、まことに海東風景の眼睛たるべき富士

の靈容。——私たちは息をひそめて富士の此の壯嚴さに茫然

自失した。數度眺めた富士の姿。そのうちで私の心をしつか

り掠へたのは、實に今度の旅行に於ける「富士」であつた。

私は感激して詩をかき、頌め讃へた。

橋に轟く、汽車

うすら日の風ひややかに

富士の尾——

國府津より小田原へ、小田原より宮の下へ。

十九世紀の殘存品、古典的匂ひこまやかなる小田原の電車

が箱根へ一步をかける好き一幅のカリカチュアよ。

足もとへ沈むでゆく谷、溪流、紅葉を點綴した林また林、山

また山、そして幾多の隧道をくぐつて、ぼつかり出た、宮の

下。海拔數千尺の山氣ひやかに、見下す溪々の紅葉、白布

をかけてゐる小瀑布、そんな風景を、白雲のなかゆくやうな

足どり、みなけろりとして眺めてゐる。旅館は葛屋、晝食は

が生徒の口で活潑に溶けはじめ。

さてこの禿山ひとつ越えて彼方は八百重の樹林、しかし晩秋の山氣は寒冷を極め、目に見ゆる寒林疎木、しらしらと樹幹を白日にさらし、參差たる樹枝はむなしく眞晝の風に嘯いて空々滅々、たゞ一空虚を掃きかへすばかりである。山上の風に私たちは颯爽と登行の杖を泳がせ乍ら放歌一番これに和した。

山嶺の隘路つくところ、たらら坂の落葉の傾斜道を前にして、あゝこれは亦素晴らしく豁達たる富士の姿。——時に午後一時廿五分であつた。

前は芦の湖に落つる倒影の富士。全山の紅葉に映ゆる白雪爽然たる靈峯の英姿。私たちは再び茫然自失これを久しうした。芦の湖への落葉堆る傾斜道を無言で降りて行つた私たちの心には、正しく焼き附けられたやうな富士の姿以外の何物もなかつたのである。

芦の湖は私たちの先輩が箱根遊船株式會社を經營してゐる好意で無賃乗船、菓子一包の贈物頂戴に及ぶ。元箱根より箱根へ。湖上風光絶佳。箱根離宮を遠望。箱根に自動艇を葉て關所趾見學。荒廢落莫ひそかに想ひを往古に馳するよすがも

いまし。どうぞお歸りを楽しみにして待つてをります……」

さて此の喧嘩から脱して龍窟へゆく。洞内泉滴つて秋尙ほ寒く、石佛數体を安置してある。洞外は大小高低種々様々に岩石が蟠居し、それへ打ちあける波は、追に十一月も終りを領させる。一行の記念撮影をし、漁船四隻に分乗して島の周圍を放歌一番で廻る。

江の島を後にして。電車を驅つて片瀬より稻村ヶ崎白砂碧波の七里ヶ濱を車外に瞥見しながら鎌倉へ。

鎌倉で私はへばつた。事實二度も鶴岡八幡宮へ行く氣のないのは人情の當然だ。脚氣の人に交つて停車場で休憩。鶴岡八幡宮は地震後、つまらないものであらうと思ふ。

鎌倉午後四時發。東京着五時半。

停車場にはお出迎への先輩の方々の顔が微笑してゐる。停車場を出れば、外は夜の大東京イルミネーションである。薄暮のうすら明りを宮城へむけ鉛のやうな足どりを運ぶ。壯嚴なる夜の宮城を夜霧の彼方に拜し、私たちは神田の宿日新館に靴の緒をほどいた。

十一月二十一日。

早朝、神田より電車を驅つて明治神宮參拜。

ない。一行針路を誤つて三島への道を探り、知つて既に晩し瘦せ腹に晩秋の山風寒く、へとへとと体軀を乗合に托して日没してより一散に底倉の葛屋に逃げかへる。可笑奇話珍談。

十一月二十日。

高原の冷霧、曉夢ひややかに旅の三日が明ける。六時葛屋を後にもと來た道を取つてかへす。小田原、藤澤を経て、片瀬に電車を乗てる。

肆店の交錯燦として肩睫に列り、風帆雲鳥は碧波浩蕩の中に出没す、と云ふ霞關臨幸の記をそのままま拜借して片瀬近傍の風景スケッチに代へることにする。海上ぼつかり浮んだは、この春お目にぶら下つたままの江の島の惘然たる孤影か蜿蜒たる長棧を大揚に歩るく私たちの黒服は、遠望者をして宛ら絡釋たる長蛇の陣を偲ばせるものが有つたであらう。閑話休題。

島上の道の兩側に陣取る旅館、茶屋、賣店、寫眞屋のお客引きの文句は正に喧々囂々、宛ら人の耳を聳せんばかり。まあざつとかうである。

「お土産いかが。お這り遊ばし。休んでゐらつしやいませ。お荷物は貳錢でお預り致します。草履とはきかへていらつしや」

明治神宮は宏大ではあるが未だ深遠味に乏しい憾みがある數度參拜した自分に取つてこの邊の描寫は筆が進まない。さて神宮參拜後、各個の自由行動となる。

或は三越、松屋、或は銀座、淺草、上野、そして處々の活動寫眞館を實にわが小倉服はさまよつたであらう。究極一日はザツクラパンなとりとめのない一日である。私の舌に残つた資生堂の一ぱいのクリムソーグの憂鬱を却いて、この東京こそ、何と云ふ退屈なそして平凡な存在であつたことか！

十一月二十二日。

飯田町發八時十三分の緩慢な速力の汽車は、やつと十時に私たちを淺川の見すばらしい田舎驛へ下した。

大正天皇御陵參拜。残念ながら自分は春すでに參拜したところでもあり、且つ亦甚しく疲勞を溜めた軀しか持合はさなかつた爲め、驛前の蠅のぶん／＼唸つてゐる小さい茶店で待つてゐた。それゆゑ、淺川御陵のスケッチは遺憾乍ら書き得ないのである。

さて淺川發十二時で東京へ逆もどり。東京發一時すぎの列車で最後の地、靜岡へ走る。——靜岡着八時。

東京に比してひっそりした静岡へ降りた第一印象は決して悪るいものではなかつた。驛前の大東館に、四日の疲労を溜めた体軀を横へる。夕食後、静岡市内散歩、大東館にて一行茶話會をひらく。種々の隠し藝とび出し、快談数時間の後、和氣あいあい裡に閉會。

十一月二十三日。

最後の日がめぐつて来た。この半日の静岡見物は私たちの記憶の一端に微かな「しみ」を附するに止るものでありとしても、わが若き日の旅の而も最後を飾るものである。一行各個人の心理に立入れば、その感慨や亦無限無量のものであつたに相違ないと思ふ。

先づ廣大な舊家康の城趾。淺間さん。縣廳。各宮家の數多の別荘。少し離れて久能山。さうしたものは唯私たちの心の上に一瞥を呉れたのみで、私たちに静岡の風物と既に袂を分つべき時が来てゐた。

静岡發正午。

島田、藤枝、掛川ころまでも偉大な東海の富士は雲表はるかに聳立して、私たちの儚い五日の旅情を慰めて呉れたのであつた。

々日に教練の査閲のあるのがうらめしいくらゐだ。

だが十九日は訪れて来た。案じた天候も御兆向と来て六時〇四分彦根の町に左様奈良をする頃には、東の空には清らかな太陽は昇つて我等の初の旅出を祝福でもしてゐてくれる様である。秋の旅は春のその様に櫻花霞と棚引き、雲雀空高くさへずると言ふ麗かな長閑は景色には接しないが、然し唐錦を織り込んだ様な木々の紅葉、又果しなく澄渡つた青い空は限りなく我々の心を踊らすのに十分である。そして我々の魂を奪ひ去つて夢の詩の國に導き去る様である。そして又身体に少しのだるみを覚えぬのは又秋の旅の特徴であらう一度車中の人となると皆夫々氣の合つたグループは思ひ思ひの話に打興じる。キネマ俳優の批評、スポーツの話、或は又文學等のついて各自の熱辯をふるつてゐる。そして我等は開放された自由の第一歩を勇ましく踏み出して無限の感動に酔つてゐるのである。近江の山々は丁度冬の仕度を終へて今にも雪の來るを物待ち顔に遠く彼方に其のなだらかな姿を横たへてゐる。話に花が咲いて來ると時の過ぎ行くのも全く知らない。車中に電燈がついて急にあたりが暗くなつたと思つた時、もう汽車は逢坂山のトンネルにかゝつてゐたのだつた

この旅行に於て、途上第一日の富士と、函嶺に於ける富士と、この二つの言語筆墨に絶する勝景。私たちの人生によき一期を劃して呉れたであらう二つの富士の姿。私たちは若くして恵まれたこの天下の絶景に身を投じ茫然自失した。かるが故に旅は嬉しく、旅は怡しく、その心は懐しい。しかし旅は既に私たちより去つた。

秋は落葉さめんと窓外にむせぶ十一月、旅を終へて静かに去りし五日を思ふ。關東五日の旅、みな去りしもの別れしものばかり、旅の筆とるさへ一脈の離別に伴隨する感傷的な哀愁を覺える。

第四學年修學旅行記

山口 彌平

五月の事件によつて一時中止となつてゐた修學旅行も、十月に至つても催される様子もなかつたが、十一月になつて終に行はれる様になつた。勿論自分等の最も當にして待つてゐたものでもあるし、又學生時代に於て最も楽しいものゝ一つであるから嬉しいの嬉しくないのつて嘯へ様もない程だ。前

「オヤツ。もうすぐ京都やぞ。」と思ひ出した様に棚の荷物を下す者もある。「ウン、何言つてゐる。京都やて？」と夢から醒めた様なキョトンとした顔をして立上る者もある。東山の長いトンネルを過ぎるともう京都だ。

東海道線を捨て、奈良線に乗り換へる。八時十分ベルの音が鳴りやむと汽車は發してゴト／＼と宇治の方に走り出す。車中では又同じ仲間間に話に花が咲く。汽車は桃山を過ぎ宇治の茶畑の中を一目散に走る。宇治平等院の屋根をかすかに眺めて、暫くする中に汽車は古都奈良の驛に横着けになる。乗換へて間もなく汽車は法隆寺さして走り出した。いよ／＼これから大和平野を走るんだ。古都、奈良朝、一寸したそんな言葉が頭の中をカスメルと、今自分等の走つてゐるこの野原までが限りなく懐かしいものゝ様に思はれる。汽車は田圃の真中の一小驛に止つた。法隆寺驛だ。汽車を捨てた我等は、田圃の中の一木道をドン／＼と進む。何とはなしに氣の落着いた、いやに静かな處だ。十數町彼方の森影より五重塔は空高く天に延び上つてゐる。これが有名な法勝寺ですか實に遠望の落着きのあることよ。こんなことを思つてドン／＼と進む。幾曲りか曲つた一筋道の道ばたには古瓦、古面、古

代器具、佛像等の陳列した一軒家を見出した時、さすがは古都の……と思はざるを得なかつた。

山門に續く松並木の間に來た時、青松にはゆる朱塗りの山門、其間の高くそびゆる五重塔、それ等の落着いた眺に接して動かすべからざる感に打たれる。清らかに掃き清められた砂場を過ぎて、山門の下に來る。「こんなものが千何年も経つてゐると誰が思ふか。」とささやく者もある。實際さうだこんな堂々たる建築が千數百年も昔に建立されたとは、現代人をして少なからぬ感動を與へる。用材も餘り古びて居らないのが不思議である。

境内に入つて先づ寶物を拜觀する。案内の人について金堂内に入る。薄暗い氣味の悪い部屋だ。線香の香が強くと鼻をつく。等身大の佛像十數体が安置してある。説明者の説明によると佛像の御顔も時代によつて幾らか變化してゐると云ふ。よくよく拜觀するに實際或佛像は圓く或佛像はやゝ細長くなつてゐる。この堂内には世界に有名な壁畫が残つてゐるとのこと。同じ拜觀人の懐中電燈の光で見ると壁畫と云つても唯古びた色のさめた畫に過ぎないが、然し釋尊の御様子や、諸佛の御姿を寫したのを見ては、自然と頭の下る様な

思がヒシ／＼と身に迫つて來る。

金堂を出て反對の側の寶物殿に入る。こゝにも同じく諸佛像及び國寶の屏風、又古瓦古面、古代諸器具太刀等數百點の珍らしい寶物を拜觀する。然し硝子張りの中に入れられてゐて其上の光線の入りが小さいので見にくい事夥だしい。然し我等は古代美術の如何に偉大なものであつたかはつく／＼と感じることが出來た。別にその古代美術が如何なる藝術的價値があるかは分る筈はないが、唯それ等に接してそれが如何に我等に響くかと云ふ感情の問題である事は云ふ迄もない。

そこを辭して門の傍の茶店で畫食を取る。千何百年も経過した建物の前で今自分等がかうして眺めることが出來るのは何だか不思議な様な氣がする。あたりは別に變つた音響もなく唯高い五重塔上の鳥がカアと鳴く聲が無闇に物古びて聞える。眼を閉じて考へ込む。古刹佛師飛鳥時代雲慶堪慶と云ふ説明者の變な口調が馬鹿に強く頭に残つてゐる。此等の總べての柱が上に行くに従つて細くなつてゐるがこれが其當時の建築法の特徴で又今日此寺の最も誇りであるとのことである。我等は此の古刹法隆寺に云ひ知れぬ懐かしさを感じつゝ、東の方東院に向ふ。八角の古びた御堂だ。それより直ちに奈良

に向ふ。○時五分の汽車で古都奈良市に着く。巾の廣い三條通を経て、菊屋旅館に一先づ落着き、其後案内人に従つて名勝巡りに出かける。先づ第一に猿澤の池に行く。水色は黄ば

んで清くはないが、衣掛け柳のあはれにも悲しいローマンスに涙を催し坂道を一直線に春日神社に向ふ。途中鹿の群に追はれる田舎者もあれば、不意に後から手にした煎餅にかぶり着かれる者もある。

秋の紅葉の色も鮮やかな奈良公園に無限の詩情を與へられつゝ、無数の石燈籠の間を縫つて、色彩あでやかな春日の社につく。一同社前に參詣をして神嚴なる八雲琴に身の引きしまるを覺えつゝ、

此度は常もとりあへず手向山

紅葉の錦神のまに／＼

の一首にて名高き手向山八幡宮に出る。「菅公腰掛石」にありし菅公をしのび奉り、暫く行くと若草山の下に出る。一同群がる鹿を前に記念撮影をする。三月、二月の有名な古刹に詣で、少し坂を下ると大佛鐘の下に出た。「誰かついて見ないか。」「よし來た聞いとれよ。」中々元氣は良い。然し打鳴らす其音の餘り貧弱さに恐れ入る。鐘をついてゐるのか、鐘

につかれてゐるのか少々判断に苦しむ。だが田部君のはずい分大きかつたことだけは記憶してゐる。

大佛殿の前には大藏省の都合で自由に拜觀することが出來ぬ。ずい分長く待つて大佛拜觀をする。

「大佛は見るものにして尊ます。」

誰か云つて笑はした。實際大佛の前に立つても決して尊嚴な氣の起らないのは不思議だ。世界最大の木造建築と稱するこの大佛殿も背景の餘りに大きな爲か決して驚く様なものではない。中には大佛の高さはせい／＼二丈ぐらゐだと云ひ出す者もある。何しろ大きいものには違はないが。

大佛拜觀を終つて帝室博物館の横より奈良公園を横切つて興福寺境内に入る。興福寺と云つても別に大きな堂宇のあるのではなく、五重塔と他に一二の小堂があるのみで、他は火災に會つて焼失したとのこと。少し北側に南圓堂の六角堂がある。それより一同宿に着き第一日の日程も無事に終了して十九日の太陽は遠く生駒の連山に姿を消して行く。猿澤の池の畔に青い光の瓦斯燈がともつた。重い鐘の音がゴーン／＼と……………。

四時と云ふのにもう騒ぎ出した。氣の早い奴は飯だ〜と叫び立てる。六時前宿を立つて朝霧細やかな奈良の町を停車場に向ふ。今日も晴天だ。六時二十七分汽車はゆるやかに古都を去つて、天理教本部の所在地丹波市を過ぎ七時三十二分畝傍驛に着く。暫く歩いて畝傍御陵の眞白な砂原を歩む時、自から襟を正さず何ものかの不思議な力のあるを覺えた。一同最敬禮をして長い御幸道を橿原神宮に向ふ。畝傍耳成香久の三山夢の中に浮出した様に淡く又濃く。神宮に到りて一同参拜の後暫く時間があるので自由行動となる。

九時二十分神宮前を發して電車にて吉野に向ふ。

電車の進むにつれて山の色も變り野の有様も次第に變りて色づいた柿の澤山なつた村を一走り過ぎて、十時〇六分吉野着。驛前に一時荷物を預けて上りかける。自動車の客引きがうるさくつて仕方がない。大分乗つて行く者もある。吉野川にかけた夢の詩の國にある様な橋を渡つて暫く行くと道は次第に坂道となる。上るに従つて四方の展望も次第に開けてオーツ〜と唯感歎の聲ばかり。歌一つ詠み度い様な心持になつて幾十回か知らぬ中に過ぎて行く。吉野神宮、村上義

光の墓を過ぎて下の千本を過ぎると頭の上に素的に大きな山門が現はれた。金剛峯寺である。雲慶のか堪慶のか知らないが、恐ろしい大きな仁王が兩側に水ももらさぬ嚴戒振り。山門をくゞつて本堂に入る。十八間四方に高さ十一丈二尺と云ふから大きさも想像されよう。其上朱塗りのことゝて實に物凄いはかり大きなものである。堂中にあるつゝじの大柱を見て「マア〜」と云ふばかり。其の下で晝食を取る。拾五錢に二つの熟し柿に頬を落さんばかり、やがて行在所の跡にたどりつく。あたりの櫻樹の葉も皆散盡して、枯木の如き中に石の垣のみ新らしく其影を残してゐる。無量の涙ぐましい感激に頬の熱くなるも禁じ難く、吉水神社に参拜する。此の社の社務所の一棟こそ、我國最初の住宅建築であるとのこと。中の千本のつゞら道を経て、あへぎ〜終に如意輪寺に到着する。寶物を拜觀。正行辭世の

かへらじとかねて思へば……の一首を矢尻で書いたと云ふ扉が残つてゐる。餘り新らし過ぎるので疑はしい。紀念スタンプをおして坂を下る。近道をとつて歸る。歌つたり話したりしてゐる中に終に吉野川に出てしまつた。荷物を預けて置いた茶屋で一息休んで一同揃つて四時三十六分發の電

車で吉野口につく。乗換へる。暫く時間があるので吹放しのプラットのベンチで休む。日の暮れて行くに従つて寒さがこたへて来る。マントにくるまつて汽車を待つ。橋本についた時はもう日はトツブリと暮れた。

旅館竹屋は驛のつき當りで相當な店だ。二階に上つて疲れた足を延ばして休む。宿の主人が巡廻動物園の廣告をしてゐる。食後目當なしに歩いて見る。全くの田舎町だ。ブラ〜としてゐる中に廣い川べりに出た。水は清い音を立て、流れてゐる。靜かだ。靜かだ。自分の魂が減入りさうだ。思ひ切り歌ふか泣いて見たい。向ふ岸をヘッドライトの光も淡く電車が青い放電を残して走つて行く。かくして第二日の日程もつゝがなく過ぎて行く。天候に恵まれたのが何より喜ばしい。

第三日

宿の眞裏の紀の川の水音に旅の眠りを醒され、明り窓より先づ第一に空を見上げる。「ハテこれで良いのかしらん。」と少々案じられる。六時四十六分の電車で高野に向ふ。別に案じる程の天候でもないらしい。紀の川の鐵橋を渡つて電車は威勢良く走る。二三分して高野下につく。さあこれからが難關だ。力杖を一本買ひ求めて上り初める、なだらかな坂だ

これくらゐなら別に大した事もあるまい。と高をくゞつて上る。

友と罪のない話に打興じて進む。何處まで行つても山又山終に脊中はビツシヨリと汗ばんで来た。先發隊が上の方でオーイツと呼んでゐる。空は何時しか危なくなつて、終に小雨になつて来た。「困つたなあ!」と心配してゐても仕方がない。「行ける處まで行かう。」と元氣百倍して進む。頭の上をケーブルカーがゴトン〜とゆるやかに動いて行く。一本道は何處迄も續く。八九才の小供が小學校へ行くんだと登つて行く。「えらいなあ。」と感心しつゝ、足を運ぶ。もうへたばりたくなつた。

坂を下りて来る婆さんにもうどのくらいあるかと尋ねると「まだ〜。もう二里程ござんすエ。」と元氣に答へてくれる。「エーッ。まだ二里も。」と恐れ入つてゐる中に「まあお若いでナ。」と笑顔を残してサツサと下りて行く。もう上る勇氣もない。「まあ死して後やむだ行かう。」と空元氣を出して進む。極樂橋に達す。あたりの景色も何も無い。唯自分の身をさへへるのが精一ばいだ。又これからの坂の苦しさと云つたら幾十度か休んで、どうやら女人堂に着く事が出来た。小河内先

生よりの密柑にありついて少し元氣が恢復出来た。「サア奥の院迄一里だ」と無理にも元氣付けて進む。十六ぐらゐの案内人がついて来る。数々の諸寺院を過ぎて一ノ橋に到着する。こゝから奥の院までは諸大名、家臣等の墓地となつてゐるとの事。橋を渡つて進むと成程無数の墓石が薄暗い檜林の中に折重なつて立つてゐる。彦根城主伊井家の墓もある。丁度神社の社の様になつてゐて特に立派である。一同低頭して行き過ぐ。明智光秀の破れた墓を見て終に奥の院に達した。

正面に長者の萬燈殿者の一燈とか云ふ御堂があつて中には無数の燈明がホノノと淡い光を放つて燃えてゐる。左手に六角堂の納骨堂、其横手を行くと長者の萬燈の後が即ち奥の院である。こゝこそ高野の最靈地とかや。別に變つたものもなく唯線香が薪の様にいぶしてゐるのには驚かされた。

一般休息所で晝食して大堂伽藍を見に行く。途中荊菅堂に参拜する。大堂伽藍と云つても有名なる金堂。六角堂は昨年の十二月二十六日に焼失して今は唯其の燒跡の礎石のみ存してゐる。他に一二の伽藍はあるが別に大したものでもない様だ。今迄晴れてゐた空は急に破れて霧の様な雨が降り出した。

第四日

どうやら寢静まつたと思つたら夜は白々と明け初めて、旅の第四日は始まつた。今日は別に汽車の時間にも束縛されないから、ゆつくりかまへて八時迄に和歌山城趾に集合する。石垣、壕等は彦根城の方が遙かに立派だ。然し何と云つても徳川御三家の一紀州公の御城であるから天主閣は餘程彦根城のより優つてゐる。然し何となしに落着きのない感じがしないでもない。

八時一同集合して天主閣に上る。四方の眺望殊に鮮かにして遙か彼方に一帶の紀の川の注ぐあたり、實に繪になりさうだ。あれが聯隊、これが高南、それが縣廳、公會堂と指さし望んで、やがて城を下りると市電で紀三井寺に向ふ。西國三十三番中の第二番の札所で、巡禮者の姿もチラホラ見える。こゝの眺望又絶佳にして、遠く和歌の浦を正面に、背面には又新和歌の絶景をひかへて、沖にて白帆の影も浮雲の如く、遙か彼方の山々は、何々島とかや、又そのあたりが世に名高き鳴戸の潮路であるさうな。暫し眺望臺を去るを忘れて、打眺める。すい分高い石段を下つて、道ばたの土産物屋で名物紀州密柑に舌鼓を打ち、和歌の浦に向ふ。

マントにぐるまつて下山の途につく。中腹まで来るともう雨は霽れてゐる。約二時間もして下についたが、頭がボカンとして人の話も耳に入らない。自分の耳が他人のものゝ様な氣がしてならない。三時二十八分の電車で橋本に向ふ。一先づ宿屋に行つて荷物を取つて四時二十分和歌山に向ふ。車中で全く日は暮れて下流になつて巾廣くなつた紀の川面には眞白な夕靄がたゞよつてゐる。

とうとう本降りになつてしまつた。五時四十八分和歌山に着いて、市電にて宿屋に向ふ。保田屋と云ふ商人宿である。設備等は不完全であるが、氣樂なのが一番愉快だ。夕食後になるとどうやら雨も上つたらしい。思ひ／＼に外出す。町は誓文拂ひですい分賑やかだ。だが雨後の事として道の悪いのは閉口だ。

十時過ぎ頃までには皆歸つて来たらしい。然し何しろ若い者の事とてさう易々と安眠すると云ふ事もせず、歌ふ者、叫ぶ者等々すい分騒ぎ立て、どうやら静まつたと思つたら一時過ぎ。

かくして又第三日も無事に豫定通りに終つたことは實に嬉しい。然し中途で少々雨に會つたのがに／＼らしいが。

東照宮、玉津島、鹽釜等の諸神社に詣で、和歌の詩情を心行くまで味はひつゝ、白砂青松の間をさまよふ。沖漕ぐ白帆に云ひ知れぬ懐かしさを覺えて、去り難い思ひになやまされる。

宿に歸る。まだ先生方も歸つて居られない。まだ時間は十二分にある。靴をぬいで上に上つて休む。宿のおかみは至極の人好きなおばさんで、兎の様な眼をして皆に相手になる。女中も總出で騒ぎ出す、終ひには三味線を引づり出して囃し立てる。女中の一人は筑前琵琶を持出して常陸丸を語つて聞かしてくれ。そんなことをしてゐる中に時間が来た。驛に走り出す。一同揃つて電車の人となる。その電車は南海電車の誇りである大濱號で、一寸汽車か電車か判断に苦しむ。まあ汽車の二等に乗込んだ様な氣ですまし込んでゐる。やがて電車は南海の白浪打ち寄する海岸を威勢よく走り出した。我等は南海情緒たつぷりな沿道の景色を打眺めてゐる中、堺も何時の間にか過ぎ去つて、大阪難波驛に下車した。圓タクがクル／＼と氣味悪いばかり廻り歩く。直ちに大阪朝日新聞社に行く。途中沿道の物凄いはかりの交通機關の活動、大阪は總てが活動とそして競争だ。近代的大建築物が軒を並べて立

ならんでゐる。渡邊橋を下りて大朝社に入る。先づ朝日會館に案内される。その大ホールに感心してバルコニーに出る。大大阪の中心點だ。北濱街のビルディングの群。中之島の官公衙の軒。船場の大商店の棟。それ等は總べて大大阪の活動のシンボルである。

先づ細いウネ／＼した廊下を廻つて活字の見學。それより紙型を見て週刊朝日の製造を見る。總べて機械力で造られて行く。「ウーン。機械の力は偉大なものやなあ。」と感心してゐる中に先頭にはぐれて迷子になつてしまふ。さん／＼苦心してやつと輪轉機の所で皆に出會つた。一分間に何千枚かの新聞を印刷すると云ふ偉大な高速印刷機である。我等は現在文明のどれ程までに發達しつゝあるかを如實に説明されて四時前に社を退いて旅館に向ふ。堺筋のけた／＼ましい自動車電車の流れと様々の人間の波に一同呆然として言葉もない。

道頓堀宗衛門町の大黒屋旅館につく。

夕食後自由行動を許されて、道頓堀に一度足を踏み入るゝや、大大阪の夜景は如何に我等の胸に響いたことだらう。黄赤紫緑の電燈に彩られたカフェーに、軒看板もあてやかな中座角座辨天座浪花座に或は松竹朝日敷島映畫あしべ等の活動

寫眞館に我等は如何に都會の享樂を覺えたことだらう。ジャズの響、ピアノの流れ。全くそこは都會の享樂の巷である。見よ。あの奇妙な服装と化粧に全身を飾り立てたモダンガールの豁歩する様を。そしてそれに引きつけられて行く活氣のない青年のあることを。さうだ。これが現在の都會の一般の状況なのだ。自分は都會と云ふものがしつかりと握つて見た様な氣がして來た。

享樂のオーケストラも音響の低く弱まつて行くに従つてこの大阪の町も次第に夢路に吸ひ込まれて行く。

第五日

今日で旅行も終りかと思ふと今日一日を最も有意義に送りたい様な氣がする。東の空が白んで來る頃より、大阪の町には不思議な渦が巻き起るのだ。それは空の一隅と地面の一角とより起つて、その天地の響が合致してこの不思議な音樂を構成する様に思へる。

も早や名物の煤煙は空を一面に苞つてしまつた。八時までに大阪城に集合。然し一度見學したものは其限りに非ず。自由行動を許された。皆夫々行きたい處に散つてしまふ。築港、四天王寺、天王寺

第二學年旅行記

家 森 武 夫

(二十二日) 旅行といふ楽しい希ひと憧れの喜に滿ち堀田杉本兩先生の引率にて、吾等三年生百餘人は橋立旅行の途についた。

吾等は今懐しい彦根と、魅する様な金龜城とを後にした。薄暗い電燈が朝の静けさと、闇に解け込んで光つてゐる。そして名残惜しそりに吾等を見送つてゐる。張りきつた胸から限なく喜びが湧き上つて來る。そして汽車は無心に走つてゐる。

よく見慣れた湖國の平野は、朝の光に蘇生して吾等を祝福してゐる様に見える。そして山、田、又田の中央に積まれた稲塚も、村端れの茅屋も太陽の生んだ慈愛の光を受けて黄金色に輝いてゐる。

僕等の雑談の更け行くとともに汽車は八幡を過ぎ瀬田川に横つた。

琵琶湖は波なく一面に水蒸氣が登つてゐる。瀬田川の水は石山の向ふを廻つて流れて行く、その流の眺も一瞬に消え失

公園、千日前、大阪城、心齋橋、堺筋、北濱街、中之島公園、天満天神これ等が最も有名な名所であらう。デパートメントストアとしては、大丸、松坂屋、十合、白木屋、高島屋、三越等あつて又都會研究家には持つて來いの處だ。おゝ。動く動く。都會と云ふものはたえず動いてゐるんだ。自分は三越の八階バルコニーでこんな事を考へた。

四時二十分大阪驛に最後の御別れを交して、一同車中の人となる。「過ぎてしまつた、五日の旅も。」こんなことを口走つて薄暮れ行く窓外に瞳を落して追想する。「だが果して過ぎし五日の旅は幸福だつたらうか?」「さうだ幸福だつたお前等は無限の幸福を味はひ得たではないか……。」と何者か／＼やいてゐる。七時十分五日間の旅程を無事に終つて彦根の驛に着くことが出來た。

「あゝ。さうだつた。もう過ぎてしまつたんだ」
外の雨風の烈しい音に耳を傾けてボンヤリ薄暗いプラットホームにたゞすむ。

早かつた。早かつた。何だか夢。さうだ幸福な夢の中に浸つてゐる様だつた。それがこの旅行の總べてだつた。

(終り)

せて、無限のスペースを流れて行く時の流を想ふのみである
八時前京都に着く。山陰線に乗り變へ、東寺の塔を後にし
清水、大文字山を見て京都驛を發す。比叡山は遠く旭日に輝
いてゐる。

京都を出づる頃、陽は車窓を射る。汽車は保津川の右岸を
走る。嗚呼絶景哉。急流岩を噛み、萬顆の泡珠は大空に晴雪
を飛ばして震轟する。嗚呼壯快なる哉。峯牙たる巖の上を走
る。魂は狂奔して飛散る如く、流に漂ひ無何有の境にさまよ
ふ如き心地がする。

龜岡を過ぎ、山間の寂しい茅舎の煙を見る。

全山皆紅葉して錦の如く、綾の如き山を兩側に見て山又山
を走る。實に卓らぐの感が胸に滿ち滿ちて来る。

これより舞鶴に至る迄數時間トランプにて愉快に遊ぶ。舞
鶴を出づる頃十一時半、我等は家より携帶したる辨當を食ふ
由良川の海に斗入する所、波高く千波萬波碎けては返し返
しては寄来る。

由良海岸は岩多く、碧波渺漫として果なく水が清い。十二
時十三分遂に宮津に着く。

直に清輝樓に向ふ。宮津間は小さくはあるが美しい間であ

る。清輝樓で荷物を預けて吾等一同は五隻のモーターボート
に分乗して宮津を出發する。

海は洋々として波なく、五隻のモーターは我が乗る船を先
頭に、エンヂンの音勇しく微風を蹴つて進み、紺碧の海上を
滑る。宮津の町端れより文珠に至る海岸は多く渚に舟を連ぐ
べう、漫たる水は天と一色。風帆相逐ひ、歎乃相答へ海面鏡の
如し。

嗚呼、天橋は我が目睫に迫り、誠に闊然の氣胸に滿ちる。
峰巒環擁し成相山は渺然天橋の盡くる所にある。既にして切
戸を通り、舟は内海に入り沙洲に沿ひて江尻に向ふ。橋上は
即ち萬松離立し水と相映帶する。海路一時間餘、江尻に達す
此の時、雨降り、一同雨を冒して成相山に登る。

江尻より傘松迄ケーブルカーあり。傘松公園は稍平坦で掛
茶屋茅屋等がある。

時方に雨晴れ、俯して望めば高爽、パノラマの様である。
何といふ幽靜な又何といふ曠遠な眺であらうか？

「中央に横はる緑の浮橋」

この幻の様な眺め、この夢の様な、又畫工が奇を衒つた様
な眺めこの眺が膈まで浸み渡つて来る様である。

遠く宮津のある所、水煙縹渺として見えす、岩瀧灣は三方
山を繞らして天橋に臨んでゐる。

此處で、此の自然美を背影にして紀念撮影をする。暫く小
憩して坂を登つて成相寺に赴く。程なく下山して橋立を経て
歸途につく。

天橋の上、松林の間を歩む。蒼樹蜿蜒として盡きず、行く
こと一里餘、路に橋立明神の社あり。橋を渡り、智恩寺に詣
でて、橋の下より再びモーターに乗る。瑠璃の様に澄んだ水
を蹴つて、秋の和やかな夕陽を浴びつつ清輝樓の後なる埠頭
に着く。

宿で一日の疲を休め、夕餐につく。夜街を歩く。

(二十三日) 上 林 道

朝三時といふに早や皆眠りをさます。

海邊に出ると、四邊の風光轉た寂寞として、一穗の殘燈は
焰冷に影暗く、消えんと欲して未だ滅せず。あたりは一面に
煙霧につつまれ、云ひ得ぬ磯の香りがたゞよふ。朝風潮を渡
つて面を撫で、寒さが身にしむ。朝食を終へ旅装をととのへ
六時五分、宮津に別れをつけ舞鶴に向ふ。

列車は再び、きはどく山谷の細道をすべりぬけ海上遠く展

開せる山上を走る。隧道甚だ多し。

車中あちらこちらに寢足らぬ夢の尾をたどり、樂しき故郷
の夢を結ぶ者有り。新舞鶴着八時十五分、天氣惡し。下車し
て後徒歩三十分餘。「舞鶴要港防備隊」の板かゝれる門前に
至る。一同港内を見學し後港内停泊中の吾妻艦をみる。甚だ
有益であつた。我艦も日露戰役當時はなか／＼立派なもので
あつたとは某將校のお話し。十二時晝食を艦内でとる。午後
機關學校見學。粗末な校舎である。然し校内總て何物も一つ
として整頓せざるはなく、實に海軍々人の規律の一斑をうか
ぶことが出来る。

一時三十五分、中舞鶴より列車に乗り、歸路につく。車中
雑談に賑ふ。敦賀着四時十七分。驛の待合で小憩して、再び
車中の人となる。發車五時五分。

柳ヶ瀬のトンネルもいつしか過ぎ、秋の日の日脚は早く、四
邊やうやく薄暗の靄色にさびしく、七時十九分秋季旅行も無
事に終へて彦根驛着。

皆疲勞をためた足どりで、ぬかるみを我が家さして急ぐ。
三々五々として――。

さてまた昨今二日を懐しく追憶の中に甦らせた事だ。

旅日記

漢見覺了

十四日夜十二時 姉川にて

青い月だ。寒気が身にしみる。早魃の名残りが青い月影を宿して、夜風に軽く漣を立てゝゐる。この流れ以外は殆んど石と砂ばかりの河原だ。其處に月見草が白く闇に咲いてゐる。月見草は幾度も見たことはあるが咲いてゐるのは今夜が初めてである。月のひかりは水氣を含んでゐると聞いてゐたが、この枯野に等しい處に咲く花は月の水氣に生命を受けてゐるのかもしれぬ。

晝は暑いが秋初めの夜風は汗ばんだ脊には流石にこたへる早速あたりの木切れ枯草など集めて、たき火に暖をとる。消えては燃える焔と共に薄い煙が月をかすめて消えてゆく。背囊枕にしばし、とう然として遠い空に見入る。またよく星が闇をぬつていくつとなく流れる。

矢張り秋の夜は物寂しい。

十五日朝五時半 尾上にて

しばらくうつ／＼して、ふと目を覺すと早や白んだ空がテ

水を捨てしうみの水と入れかへた。

やがてブク／＼とそら糞えた。やつつける。腹のへつた連中出来たての飯に舌を焼きながら箸を突つ込む。S君の如何にと見れば湯氣の立つ飯と共に藻草が二筋三筋一同横目でウツフフ。S君負惜しみに「うまいぞ……」

十五日夜八時 鹽津にて

やつとの思ひで着いた濱邊は思ひ掛けぬじめ／＼した所でも一夜の宿どころでない。仕方なくあちらこちらと尋ね廻つた揚句、村の小供に教へられて一つの或る小さな空道を借りることにする。胸に達する程の草が生ひ茂つてあまり良い心地がしない。が四邊は段々暗くなる。文句など云つてゐられない。草を押し倒ふして敷布がはりにする。家の近くにあるので飯をたくのは遠慮して先刻買った駄菓子と村人から貰つた茶で腹をこしらへる。

「あんたはん達風呂が沸いてますがどうです」

一般に都會に行く程人間が薄情だが、それに反して田舎へ行く程親切だ。茶は呉れる勿論番茶だが……野宿するのに筵をかしてくれる。揚句に風呂までもすすめてくれる。一日中汗にまみれて歩き廻つた身にとつて此の上もなく有難き

ントの繼目から見える。風がかなりあると見えて天幕が波立つてゐる。身体がぞく／＼寒い。傍らにはM兄とK君の兩人が顔を突き合して軽い駢をたてゝゐる。どうやら旅の第一夜が明けた。こつそり起き出て朝飯をたく用意にと枯枝など集めてゐるとS君が寝呆け眼でのろりと這出して來た。朝風にふるへながらも充分と思ふ頃M兄とK君T君が續いて起きて來た。昨夜姉川を立つて此處に着いたのが四時過ぎ、殆んど二時間ばかりの睡眠で皆ぼんやりした顔してゐる。頭がはつきりしないが、清々した朝の氣に旅の最初の朝の氣分は又格別だ。飯をたきかける頃村の婆さんがのこ／＼やつて來た

「あんたはん達は生徒さんですか。旅行どすのやな——御飯たきやすのか——この間も兵隊さんが來やほつて……」等々たて續けに獨り喋つてゐる。こちらはそんなことにかまつてゐられない。空腹かへて飯の用意にいそがしい。すると婆さんが

「あんたはん達は井戸の水で御飯たいてやすのかな……」妙なことを云ふと思つてゐると「うみの水でたいてみなはれ、そら美味しいおすホン……」と妙なアクセントで妙なことを云ふ。物好きなS君早速物はためしと、折角飯ごに入れたこえる。感歎家のS君しきりにかんたんする。余程臍に銘じたらしい。しかし皆口こそ云はないが疲れてゐるため服などぬぐのが大儀らしい。そこは以心傳心、結局お断りして早く寝ることにする。ところが場所が場所だ、皆が静かになりかけると急に蚊軍が襲撃してくる。向う脛でもピンヤリとやろうものなら無花果を握りつぶした後の様にぬるつとして余り好い感じがしない。これには大の男もどうにもならない。下手にもがけば近所迷惑蚊取り線香など無線香同様だ。蚊張の有難味をひたすら感じる。今夜中に吸ひとられる血液の量を頭算しながら、明けを待つ。

十六日拂曉 同所

皆も寝つかれぬらしい。時々蚊をたく音がかきこえてくるそつとテントを這出すと冷氣一陣ぶるつとする。あたりはしん閑として家の灯一つ見えない。遠くに社の萬年燈らしいものが田圃の中に二つボツネンともつゐる。近くの山のふもとにある墓場の石塔が物凄くより淋し相だ。空には霞がかつた半月が冷たく此等の姿を見下してゐる。家、木、墓石などが靜かに黙々としてゐる程家が憶ひ出され、温かい寢床が目の前にチラツいてくる。

四時頃皆出發の仕度をし、再び暖かい番茶を水筒一杯に貰つて、まだ明け切らぬ田圃路を一行にならんで西へ〜と行く。親切な村人の心に感謝しながら。

十六日夜十一時 今津にて

今夜も寒い。月も青い。海津がよひの汽船が黙々と夜更けの濱邊を走つてゆく。岸邊の水が夜風に小さくうねつてゐる。静かな夜だけに目に入るもの何もかも淋しい。隣りに寝てゐたM兄が突然軽い咳をした。胸をいたためてゐるM君はこの夜露をおんだ冷氣に惱まされてゐるらしい。自分も旅行以前から腹の具合がよくなかつた所へ生水を矢鱈に飲んだために飯も祿にのどを通つてくれない。旅で飯の食へない程つらいものはない。今M君の有様を見ると同病相憐むの情をぞろに禁じ得ない。宿るにしても今夜は何もない。砂の上に寝ころんで夜露をしのぐためにテントの一片を被てゐるだけ。勿論寒さしのぎにもならない。他の者は夜寒むよりは晝の疲れがはげしいと見えて軽い解さへたてゝゐる。寝られぬまゝに色々することが考へられる。遠い向ふ岸にテラ〜する灯を見るにつけても家が戀しくなる。明日は大津さして十幾里歩かねばならぬ。が寝られぬ。

十七日夜時不明

今日大津までの豫定も連日の疲れと堅田に於ける晝寝のため目的を達することも出来ず夜道をトボ〜真にトボ〜と歩かねばならぬ。憂いことである。憶ふに堅田に着いた時は着くなり休憩所のベンチの上で寝てしまつたらしい。目を覺した時は太陽がガン〜照りつけ顔がひり〜してゐた。晝夜ぶつ續けに歩く上に、唯一つの時計まで壊したので、さつぱり時間がわからぬ。後に氷屋で時をたづねたら十一時半とのことであつた。それからであつた、浮御堂を見物したのは。近江に名高き堅田の浮御堂も、この疲勞病者にとつては何の價値もない。或は自分ばかりでなく一般の疲勞病者には天下の絶景も一時の休みより劣る理屈になるかもしれない。其處を出發したのが午後一時頃。今は名も知れない野路を五人の男が、腹かかへてさまよつてゐるのである。軍隊の強行軍でもこんな無茶はしないだらう。飯をたくにも真夜中、せめて水をとつても、あたりに井戸一つ見當らない。M兄とK君は何處かの畑で無斷頂戴した茄子をかじつてゐる。いくら腹がへつても到底自分には眞似の出来ぬ藝當である。其の後何處をどう行つたか、ふと氣の付いた時は皆橋の上に仰け

旅行記

木村 三雄

になつて前後不覺、この橋の上で休憩中逢いうと〜としまつたらしい。こゝでも亦疲勞中の休憩は睡眠に通ずるの定理を發見する。かくして何時の間にか今朝即ち十八日を迎へて又大津路さして出發する。

十八日夜九時 大津にて

大津だ。疲れた心にはこの大津の二字が又となくうれしいイルミネーションも輝やいてゐる。氷屋がある。果物屋がある。カフェーもある。暗い田舎と違ふ。電氣が明るい。町が賑やかだ。けれ共此處は君達とお別れの町だ。共に夜露にさらされた君達とお別れする所だ。

「では諸君此處でお別れする。大いに元氣で日町まで歸へてくれたまへ。僕はこの汽車でお先きへ失敬する。折角の旅行をこんな病のために共に最後までやれないんで本當に残念だ。が仕方がない。今夜家にかへると僕の早くかへつたことを、あの苦勞性の母はきつと喜んでくれるだらう。ではお別れだ。どうか元氣で最後までやつてくれ。では失敬。」

暗闇の星まばらな彦根驛を午前六時四分の汽車で西先生鳥生先生のお送りをうけて立つ。
車中爲ににぎはうて驛附近の水車もせ〜ら小川の波にうるはふ。薄明き村々を越し〜て京都驛に着く。時に東天より快よき朝日が京都驛の隅々までも照し、先づ幸先のよいのをよろこぶ。

なつかしや京の東寺の小白鳩

朝日照るレールの照れる都朝

それよりのりかへて清らかな保津川べりを綾部に向つて走る。稜すりへらされてのんびりした石が兩岸にむらがつて、秋の紅葉は紫にかほる水中に倒影して得も言はれぬ絶景である。水上より流れ来る清冽なる水が川中に坐せる巨岩に激して天に晴雪を飛ばし後は滔々と落ちて又緩々と流る。川は車窓の左に或ひは右に出で千變萬化きはまらない。

綾部に着いて乗かへて、宮津に到る。途次海岸の見えて山にうみし皆の目喜びに輝く。

宮津に着き荷物を宿に托して直に小モータボートに分乗して天橋に向ふ。文珠が鼻を過ぎ塔を斜に拜して一文字に成相山めがけて進む。

時に小雨降り来り、風蓬然として起り、長橋も今は雨にうすれて形奇なる松並木に颯々の響のみ高い。

成相山麓に着く。雨が稍々強くなる。雨のあがるを待つてだら／＼の石ころ道を進む。半時傘松のある平坦な所に出る。この小屋に休んでそれより與謝の海を展望する。雨晴れて水而瑠璃に似て其の中程に一尾の蒼龍、波に伏するが如く見え松翠は水に蒸して眞に絶佳景勝の名に恥ぢない。

股のぞきをやるもの茶店に繪葉書を買ふもの、一同は思ひ／＼に下山する。愛らしき娘等がよい聲で土産物を賣る。

土産賣る娘愛らし雨やどり

歸りも船に乗るは興なしとて一里たらずの造物主の浮橋をぶらつく。蟠るが如き松、天風に嘯ぶく松、一路さく／＼足軽く白沙をふんで歸る鬱茂たる萬松の兩側に碧波の見えていと嬉し。

綱うつ男數人、腰にまきたる藁だれは古風で優美である。解し得ぬ語で話してよい／＼と綱を引く殊によし。半ば過ぎ

まどろみて海面を見ぬよき夢に。

明くれば二十三日、海風寒く白鷗一つ。

六時頃驛に集合又雨ふる。宮津を辭し舞鶴に到りこれより新舞鶴に到る。車を降りて防備隊を訪ひ、又出で、軍艦吾妻を見る。がん／＼と鐵を打つ音ゆるやかに煙はく艦、はるか神道の船渠にあるを見る。演習にて破損したのだ。將校は言ふ「譽ある艦だが今はぼろ船で」と。マスト、煙突に大いなる弾あとあり、晝食を開く。去りて機關學校を訪ふ。色々説明あり。

これより中舞鶴に到る途、水雷艇あり明治二十七八年戦後威海衛總攻撃参加云々……と横腹に白書して雜草の上に轉がつて居る。懐古の感を深うす。

中舞鶴より新舞鶴に到り、又車中の人となつて敦賀に向ふ今は興もない。午後四時半頃敦賀に着く町に出て腹をこしらへ又乗つて去る。

時に日はとつぶり暮れて車窓の景色も見えわかず。一同黙々として元氣なし、七時半彦根に着く。

雨の中を土産物ぶらさげて皆に別れて家路に急ぐ。

たりと後をかへり見れば萬松まねきて別れを惜むの色をなして天色も又暗い。

橋立明神のほとりの白砂殊に皎麗なり。

時にひとでを見つけて皆むらがりよる。切戸を渡つて文珠に詣す。多寶塔を拜す修繕中なり。丹後の震災でくづれたるよし。又船によつて涙が磯を過ぎ宮津に着く時に午後四時頃である。夕飯を認める。

夜の濱もよい。友と散歩するに尖月半天にかゝつてなだらかな海面又光る。暮れたる海に鷺一聲かなしく飛びさる。後は又静かで折から渚を離れたる小舟月に照れる與謝ノ海めがけて一文字に進む。後に残る小波さら／＼と音を立て、散りきらり／＼と輝く。

文珠附近の點々たる漁家の燈遠く波にきらめいてこよなくよい。たゞすめば磯の香のかすかに香ひ、金波白沙が中にはら／＼とくだけてしまふ。

泣いて見し月のよき夜の渚かな
暮れにけり與謝が島山燈かすか

十時頃寢に着く騒々しくして眠れず。興にとて暮うつものがある。パチリ／＼と夜の宿をにぎはす。

宮津から大社まで

土田太郎吉

午後九時九分宮津を出發して大社へ向つた。

列車は幾つかのトンネルを越え由良の海岸も何時しか過ぎて舞鶴へ着いた。其所で乗換し又綾部でも乗換した。然し此列車は大社へ直通だし又充分な席もあいてあつたので安心して眠むつてしまつた。

幻に城崎濱坂を過ぎた。ふと目を醒して見ると未だ邊りは眞暗だ。窓より顔を突き出すとひんやりと夜の氣が頭を冷した。餘り氣持が良いので景色もろくに見えもしないのに眺めてゐると汽車は停車場へ入つた。何所だと思れば驛夫が鳥取／＼と繰返し叫んでゐた。汽車は驛をはなれた。鳥取つてどんな町だらうと窓からのぞけば餘り電氣も燈つてゐなかつたのでよくわからなかつた。そこで頭を引つこめて餘り早くから目を覺ましてゐても馬鹿らしいので又もや揺られながらこりと横になつた。

充分寝厭きた頃目を覺ませば曉風爽やかに明け行く東雲は光に輝き車中も光に起されてか旅客はどん／＼洗面所へつめ

かけた。僕も顔を洗つてすがすがしい気持ちで左の窓より外を見れば雄大極る伯耆大山が空突くばかりに聳えてゐる。折しも大山の影から赫々たる日の出を！ 太陽は大山に半形を表はして如何にもお早様と云つた風に我が汽車の窓にさし込んだ。色彩られた空天に豪大なる大山を眺めいはんや朝日東天に上るを拜しては心何んと無く暗れてすが／＼しく善良に且つ神秘にふれる。どう思つても懐かしい様な山だ。然し時間は何時迄も見る事を許さない。汽車は大山を後にして米子へ着いた。米子で辨當を買ひ求めて列車の出發と共に朝飯を廣げてむさぼり朝の太氣を呼吸しながら次第に展開されて行く中海を右に見朝日窓越しにさして歡喜満ち／＼てゐた。やんやと外を打ち眺めてゐると早くも松江に着いた。小泉八雲先生の作「松江の朝」何時ぞや學校で學んだ事が思ひ出された。讀本にも川の風景や宍道湖の事を審らかに上せられてあつたがどんな所だらうと思つてゐたが今初めて本當に松江の朝を眺めた。國語で習つておくので此の地を去るのがおしかつたがしかたなく列車は一走り宍道湖をも通り過ぎ様とした。霞にもえたつ宍道湖山に圍まれたる海さながら湖の如くにして又大海の如し。薄色の霞が湖水面を長くたなびいてそ

の長き霞は向ふの山々を蔽ふてゐたが次第に山を去つて何所へ行つたのか？ 今まで廣々と何處の果てなるを感じなかつた宍道湖は今狭きまでに山々峯々に取り圍れてしまつた。色々と宍道湖を賞してゐたが嗚呼！ 山は宍道湖を隠してしまつた。列車は湖から去つて早や今市に着いてゐた。そしていつしか出雲の大社に着いた。

向ふに大社の山が嚴めしく空にきつと立つてゐた。

昭和二・八・二六旅行

伊吹山に登る

戸下 善 朗

待ちに待ちたる八月六日。いよ／＼伊吹登山の日とはなつた。朝の讀書する間は、彼の雄大豪壯の縣下最高峰伊吹の山を慕はざるを得なかつた。これも僕には始めての登山であるからだ。窓を開けて遠く北の方を眺めた時、最早じつとはして居られない。わく／＼して登山のことばかりに心をひかれるのであつた。母の言葉に耳をかかさず準備をさ／＼怠りなく済して既に縁側には、金剛杖・運動靴・ゲートル・辨當な

いたはしな、名も恐ろしき虎の尾に

まじりて咲ける撫子の花

んど整へて居る。フト、伯父さんの金剛杖を手を取つて見れば「伊吹頂上」といふ印が二つ焼きつけてある。今度頂上へ登れば此の下にもう一つ印がつくんだなどと考へて居た。折柄不意にお母さんが、「御飯ですよ」と、呼ばれる。あゝもう二時間すれば出發だなど小躍して食膳に着いた。それから父から勧められて假寢をした。しかしねられない。眠つたかと思ふと又父の聲がした。オヤと思つて飛び起きて、急いで旅装に身を固めた。イザ出發！ 途端帽子がない。こゝに周章で一小劇が起る。あゝこれから親しい伯父さんに連れられて、勇み急いで登山の途に上るのであつた。

能登川驛から汽車に投じ、汽笛と共に、稻田蒼波の間を走つて、近江長岡驛に下車した。これから一里餘で登山口上野に至るのだ。大道小路廻り／＼て、伊吹の麓に着いた。仰望すれば壯大にして空高く、如何にして登らんかと愕然たらしむる程である。先づ鞋を締め直して、鎮座の宮様に参り、登山の無事ならんことを祈るのであつた。杖にすがり右曲左折昨夜の雨で爪先上りも迂りさう。阪路極めて峻に、木の根を掴みつゝやつとこれで一合目。急に展開して百花嬋妍たる芝生に出た。

側のバラツクを見ると。スキー場と書いてある。ヤア此處がスキー場だな。雪の世界を想像した時に自ら血湧き肉躍らざるを得なかつた。見下せば山あり、町あり、彦根金龜城は白聖陽光に輝いて居る。小山を隔て、西方遙かに縁をたゝへたる竹生島は、波濤の間に隠見して真に一幅の活畫である。側の木の株に腰を下して、熱汗拭き／＼一陣の涼風に、頓に苦熱をも忘るゝのである。又、進んで既に空高い別天地に來た。そよ／＼と草葉を縫ふに風が来る、草花が、疎らに上品に美麗な頭を振つて居る。伯父さんと話ながら迂曲した路を上つた。日の暮れ近く三合目に辿りついた。僕等は小舎に入つた。こゝで十二時まで休むつもりである。まぶしい夕陽は全山を染めて、真に美しい。二本のサイダーに渴を醫し蘇生の思ひをした。辨當も一入甘く食べた。小舎の主人は齡は四十四・五才で中々の愛想のよい、滑稽な人であつた。さうして伯父さんと靈峯の話に時を移して居た。風が時折ごと戸をたくので寂しい忌な感がした。何時しか、傍らの椅子に身を寄せて、話を添乳に夢路を辿つた。突然墜落！ と思ふや既

に自分は傍らなる蚊遣火の中に落ちこんでゐた。咄々！ 一
 大事出来。時は十一時。伯父さんの「出發の令」で、外套を
 被り、金剛杖と懐中電燈とをシツカと手にして、主人に見送
 られつゝ闇路を急いだ。時々螢が叢の中に靜かに寂しく、點
 々と光つてゐる。薄は風に吹かれて、ザア／＼と氣味の悪い音
 を立てゝ居る。而も懐中電燈は時々曇つて一寸先も照し難い。

聲はしてそれをもわかぬ黒雲に

友の姿をかくす闇路を

先方の山隙に一つの燈火が見えた。あれが四合目か？ 中
 々遠い。來て來れば「七合目」としてある。四・五・六合目
 の燈火は雲のため知らずに過ぎたのであつた。七合目のスタ
 ンプは早や我が手帳に印された。それから朝日を樂しみに急
 いだが、何處に八合目があるのだから難い。遙か遠方の薄
 の中に小さく燈火が雲がくれに見えて居る。伯父さんは「朝
 日は拜めるかな——」と不安さうな獨言を云つて居る。「オ
 イ、星が一つ見えてゐるぞ。日輪も拜めるだらうよ」と勇ん
 で、八合目に來た。三々伍々燈火手に手に上つて來る後の人
 負けまいものと、石に躓き草を匂ひなどして進んだが、夜
 が白々と明けそめてやつと頂上に辿り着いた。床凡に腰を下

した時は四時半であつた。サア目的地點に達したのだ。素志
 を貫くこの快感！ 胸中惘然滿身唯歡喜の情に充たされたの
 であつた。

伯父の後を追ふて行く。日本武尊の石像の前に御討伐の遠
 き昔を偲びて、盡忠報恩の念己み難く、暫しはこゝに佇ずん
 だのであつた。進んで測候所の邊についたが白雲濛々更に眺
 望がきかぬ、朝日は勿論だめだつた。遺憾の極みである。徘
 徊數刻、四望晴れ渡り颯爽清冷、峰巒は盤礴して蒼翠天に際
 し、地高く眼豁く一望萬里實に絶佳、奇又奇、快又快、妙と
 呼び絶と叫び精神恍惚として、羽化登仙の想をした。求めて
 「伊吹頂上」の印は金剛杖に印された。草葉原の小徑を辿り下
 る。あたりに花晶續く。思はず草花を踏む。遠く鶯の聲も聞
 えてゐる。

伊吹山谷のあなたや春ならん

今日も聞ゆる鶯の聲

仙境に心を洗ふて下界の人となる。行程頂上まで三里宮様
 に詣で、長岡驛に着いた時は正に十時。

あゝ伊峯！ 長へに高く清し。而も名ある藥草香氣馥郁。
 吾れ他日再び來りて、汝と遊ばん。さらば伊峯よ。



部報

端艇部々報

(北村彌一郎記)

部長 池田先生
 理事 倉橋先生

委員 五年 江龍謙二
 北村彌一郎
 大中 威雄

四年 大竹 徹治

清水 伍位太

尾本 市平

三年 居山 猪一

小澤 實

部報

我が部の覺醒すべき時は到りぬ。過去に於
 ける名聲をば再び我等が頭上に掲げむものと
 新學期早々より部長初め理事委員の努力を録
 して我が愛校心深き諸君に示す。

本校創立記念日校友會

端艇部大會之記

五月一日、大河内湖の朝な、あるかなきか
 の風に三色の旗ははためき、午前八時草木深
 き大河の地に本校創立記念日を祝すべく、端
 艇部大會の開會の式は擧げられ、やがて嚴か
 なる空に號砲は打ち上げられたり。續くに選
 しき若人の競漕の力強き、人々の心は引き緊
 めずんばをかれず。前半の普通レースに於け
 るオールの亂れも何時しか消れて、對區レ
 スの舵手の聲の水上に滔々と響く。又その艇

進の心地長きは例へんにもの無しと言ふかや
 がて職員レース行はれんとするや、學生時代
 に若返へられし先生方の、てんでに意氣込ま
 れる様子の面白さ、おかしさ。

偕てスタートの號砲が響くや、一も二もな
 く力漕して我こそ世の端艇王たらんささるる
 のか知らぬが、その滑稽さの人氣を呼ぶ事。

これぞ大會の華である。その他來賓レースに
 於ける先輩諸子の赤鬼の意氣は、大會に一際
 の光輝を添へ、二年級のクラスレースに於て
 は幼き者の意氣に三軍を叱咤すべき者もあら
 んなどと廻想する間、最後のレース遂に來る
 年級レース。嗚呼之れこそ全校生徒の血を湧
 かし胸を躍らさんばやまぬ戦である。然も年
 級を負ふて立つ各七名の選手のおもかけ……
 ……何さいふ底力のある顔か。靜かに選手は乗
 艇し暫時試漕をなして後各艇はあざやかなサ
 リエートを爲してランチに連がれる。

黙！ 黙！ 嵐の前の静けさである。

己が身、年級選手を應援する聲を微かに聞

よりも一人之れまた已むを得ず退きたれど、解散せし第二選手中より選び退へ、此處に破らんとすれども破り得ぬ心の連鎖を見、心中喜を禁ずる事能はざりき。而して我等は競艇に慣るべく彦根高崗の艇を借り、單艇湖上を縦横せり。

斯くして七月も半過ぎ、暑中休暇も来りて校友は楽しき家庭に急げり。然れども我等には其れにも優る喜あり。日毎愛艇を浮べ湖で上に雄飛し、以て檣舞臺に立たんとする我等赤銅の肌にも赤鬼魂を宿し、涙を汗にぬれつみみれて一日は暮れむとする時、我が懐かしの艇を艇庫に休めて終日の勞を謝す。樂しき哉我等。幸にも練習の後半期に於ては一人の病者も無く、來るべき晴の戦の日を待てり。

雄松遠漕之記

大會も間近になりたり。此處に於て我等一同今一際心身を鍛練せむと思ひ、部長も相談し雄松への遠漕を行ふ事を致されたり。斯

ば、此處に應へて艇は宙を飛ぶか疑ふばかり。遂に艇手はオールスローを絶叫せり。噫！我は泣きたり。選手は全て男泣きに泣きけり部長、西山氏及び艇手の助けに依り漸く蘇生したる心地して、手を見れば赤血滴り、臀も亦皮膚破れてシートに赤印は附せられたり目は汗の入りに痛み涙は又もや頬を傳ひぬ。されど終に雄松は見えたり。手のとどくかとも思はるるを……喜ばしきは此の上なし。後十五六分軽く漕ぎて白砂の上に愛艇を休めた

り。遂に達したる哉、雄松の地。右には比良の山々の天に聳ゆ、其の麓は湖になだれ波打際を走る松の緑は白砂に映じて……五里か十里か。左には沖の島の重々しく水面に陰影を映し、その脊に霞む青山は安土の山が將た何か白砂の濱には地引網を此處彼處と引きて、女子供の手傳へる様も之れ又一つの情景か。

午前十一時半湖畔の雄松館に入る。白砂の上、松の林の中に建てられたる納涼

くて七月二十九日より二日間の豫定にて遠く西に向ふ事となれり。七月二十九日は早朝四時半に出漕の豫定なりしも約一時間遅れ六時に近き頃、芹川の河口に部長と西山氏を迎へたり。此の時早や赫々たる太陽は東山の端を去り、湖上には連の黄金色にきらめくを見たり。

いさ、我等は湖の西岸雄松に向つて進まん見送り下されし藤村氏や池田克平君に御別れして、艇は辭に西に向げられたり。

最初十分間の力漕。西山氏のコーチの許に朝の静かなる水面を突き進む心地よさ。汗も出でず、風は微かに有り、波はささやくのみ。次は二十分間のロング。途中競漕の積りにて五分間力漕。暑さ可成り加はり、汗も幾分出でたり。オールは汗にてぬるぬるし、確實に操る事能はず。二十分間を漕ぎ終るや、各自ハンドルに綱繻を濡らして巻きたり。此の時多景島は右側に近く、白石も大きく見えた

り。臺に暫し休みて朝食を採りぬ。斯くて後午後も亦三回五分間の力漕を試みぬ。

漸くにして日暮れむとするや、急に風出で波荒く雨さへ伴ひ來りぬ。我等はいち早く愛艇を全て砂上に引き上げ、松の檣に雷鳴を聞く夜に明日を案じつつも床に就きぬ。

翌朝風は静まり、波は餘波の残るのみ。六時半朝食を採り七時に雄松を出發して歸途に就けり。前日は北寄りのコースを經て來たるを以て、此の時は南寄りのコースを採り霞の中に見ゆ荒神山の方向を豫め定めて進めり。波は南より少々有りしもめげず、最初は十分間、次に二十分間をこぎ沖の島のすぐ北側に出でて休む間に、微風に依りセイリン

カして三四町進めば、沖の島の南東より湖南汽船出で來たりたるにより、競漕せんとて汽船の柳ヶ瀬に着するまで、ぎたるも早や荒神山の麓まで到達し居りぬ。其の時間四十分。此處荒神の麓には波止場より一舉に來りし事屢々なりしを以て、早や歸彦せる心地し喜び

次は競漕の積りにて五分半の力漕を三回。第一回の力漕にて白石の左方に近く到れり。

鳥には數多灰色の鳥集ひ居て南洋の無人島を忍ばしめたり。第二回のそれにては西江洲の村々のあらばに見え、池田部長の話によれば此の邊が即ち彦根と大溝との中程なりミツヤ而して雄松は此處より西南に當るとなり。故に第三回の力漕は西南に向ひて行ひぬ。嗚呼此の時途に水面は油照りと成り果てたり。波は漕の微風だに無く、眞向よりは太陽の直射を受けて汗に糊るゝ肌の痛みは極なれども斯様な事をひかへて語らぬ我が懐かしの選手哉。

次は半時間のロング。途中指適して二十本の極力漕三回及び、此の終り頃に競漕の積りにて五分間力漕。水面は依然として油を流せし如く、西山氏の聲を聞くととも無く聞くに後五日間さいふ。

いざ！ 六名の漕手は最後の五分を満身の力を込めて漕ぐ。其處に大聲を擧げて勤ませに身にあふれたり。

此處に於て三十分のロングを引く。されど達せず。尙五分間の努力を積み、漸く日頃の休憩所大蔵村社の社に入りて五體を休めた

り。時は午後零時半。嗚呼！ 遠漕も終に終結とはなりたり。然して部長は「良く努めたり。永へに昨日の三十分のロングを忘るる事勿れ。然してかの男泣きを以て大會に望むべし」との言を残し歸宅せられたり。此の時五體は全てひりひりと痛みぬ。或る時は皮膚が破れ又或所は汗に濡れて血のにおひ。されど我等は遠漕を果てたり。戦よ來れ、何ぞ恐れんや。西山・藤村両先輩のコーチに依り鐵より堅き臂は作られたり。いざ戦の日よ來れ。

全國中等學校優勝競漕會

出漕之記

冷風は大湖に漣を起して我等七名の爲め祝福せむとするかの如く絶好の練習日和を恵み

又或時は怒風を送つて我等に苦しみの経験を與へくれたり。五月中旬より此の方決死の許なる練習は、遂に七名の胸に必勝すとの自信をほめかせしなり。八月二日午後四時大津の町に第一歩を踏みしめし時の我等選手の感……右には石場ヶ濱、左には恨積れる比良、前方波上の彼方には我が懐かしの彦根、見よ五日の後には、嘗て天下に轟きし名を再び我等が頭上に輝かさむものを……二歩三歩と踏みしむる時、涙は頬を傳ひて流れたり。これぞ感慨無量の涙なる。

四時半頃無事佃亭に宿り後京大端艇部事務所に翌日よりの練習を申込みぬ。

明くれば八月三日、大津に於ける練習の初日なり。練習は午前・午後の二回。然も練習の痛矢たる此の日の朝に於て、我ながら驚くべき力に七人の中より生れ出でたり、レコー下四分四十七秒といふ。コースを引き終りし時舵手は「切れた」と大聲を擧げたと同時に、六名の選手は全て勞れを忘れたり。十三

秒切れたるなり。喜びに満ちたる池田部長と七名の選手の顔。陸に上るや全ての人の視線は我等に集められたり。祝福せる人と不安なる他校選手との交錯せる視線なり。

「力は有り。八月七日乎早く来れ」と天より聲せし如く思ひつつ、夜に入れば身体を冷やぬ爲めとて、冬の身仕度にて床に就きぬ。斯くて爽かなる朝ともなればいち早く跳ね起きやがて朝稽古としてバツク壘に一通りの練習を済ませて後、十本二十本と満身の力を込めてストラップの引き合ひを爲し、又或時は腕角力に餘念なし。

かくて三日四日過ぎ行く儘に、練習を積み八月六日には例年の如く出場選手の懇親會行はれ、一同列席せり。時に滋賀縣知事及び大津市長の所感を述べられ、後委員の競漕に對する注意ありて番組の抽籤行はるや、満場の戦士已が敵は何處と堅睡を飲む。やゝありて我が敵は現れたり。

第七回

ニシートを遅れたり。「ミッドルヘゼー此處二十本」我が舵手は敵に先んじて叫ぶ。さ一擧に我が艇に起る漕手の呼應の聲。

我等が漕ぐべき時は此時なり。勝つも負けるも此の時の奮闘如何に在り。六百米より九百米の間、敵も弱れば我も弱るの時、見よ！其處に華々しき戦の演ぜらるゝを。七百米に入る。我は米子に迫りて將に並び進む時「此處三本」の我が舵手の聲に、我が艇は早や米子の艇に先立つ事一シート……

ニシート……三シート、見る間に彼は氣を落したる哉。遂に九百米に入らんとして「ラストヘゼー」は各艇に叫ばれたり。僅か後五十本哉……ゴールに入れり。彦根中學 二コース 白 一着 四分五十秒 四日市商業 一コース 青 二着 米子中學 三コース 赤 ゴールアウト

終に我は名を爲せり。米子中學は一艇身を遅れ然もゴールアウトしてオミッシーされ、四

四日市商業 一コース 青 彦根 中學 二コース 白 米子 中學 三コース 赤

斯くて大正十三年より此の方速りさまに四度までも米子中學を敵に迎ふることは、然して其の間一歩たりとも先を譲らざりき。故に我が根は骨髓に達し、今年こそは此の夫會に於て敵の鋭を挫き、以て此の三ヶ年間の恨を晴らさんさて、我等は共に一堅く手を握りて盟ひたり。

倍て宿に歸り西山氏に敵は米子なる事を語れば、豫想當れりとして策戦に幾時かを送りぬ。明くれば八月七日、待ちに待ちし大會は來りぬ。天は曇りて暑からず、風も爽かなる朝には消えて後なし。實に其日なり今年よりは朝の集合は癡止されたれば、八時頃宿を出て行くに、戦は將に酣にして、或者は先輩に後友に喜々として迎へられ、或者は悲しみを色になして陸上に上り來る。やがて我等の戦ふべき時は來りぬ。早朝より我等の爲め已

日市商業は二艇身を遅れし哉。嗚呼！我は米子を斃したり。過去の恨は麗しく晴れたり。部長始め先輩校友の喜びの視線を浴びつつ一先づ宿に歸れば喜び迎へられ、米子と我との苦戦は踏み止どまりて見居られまじとて、戦の始まらぬまでに歸り居られし藤村、西山両先輩に戦況を語れば、その

ればりにて再び戦に當るべしとて勵まされ、牛乳や鵝卵を啜りて又戦ふべく出發しぬ。第二回！

第十四回 宇和島中學 一コース 青 彦根中學 二コース 白 宇和島中學は一昨年の優勝校、我も亦之れ嘗ては優勝校たりしもの。両頭の鷲の將に争はんとするや、東風と南風と颯と水面に吹き降せば、三角の波は、或は西に、或は北に追し進む。

斯くて 等はその波立つ中を鮮かなるサリユートを終へてランチに引かれ行けり。

が母校の爲めに應援すべく訪れ下されし先輩諸子及び校友の方々も、堅く必勝を盟ひて上艇せり。

鮮かならずとも例の如くサリユートしてランチに繋がる。スタートに向ふ三艇は黙として語らず。米子中學の選手に何處か忘れ得顔の二つ三つ在るをながめつつスタートに着きけり。ストロークザイドに米子中學を見、ヴァウザイドに四日市商業を見る。

いざ！今こそ漕ぐべき時、用意は良し。サッ！と光りし一發、三艇は同時にツイを後にして突進せり。

四日市が急調に出でしは？ 最早四日市の運命は定まれり哉。我が舵手の「ストロークストローク」と絶叫せるが聞ゆるか？ 米子は我と共に進む。彼少しくピツチを上ぐれば、我はストロークにて悠々之れと並ぶ。共に與に進退自在なり。四百米に達するや、米子半艇身を先んず。然れども我は依然ストロークにて應ず。此の時早や四日市商業は我に

やがてスタートには一發の銃砲と共に兩艇は突進したれど、二百米に於て我早や一艘身を先立たれたり。然れどもあせる事なく悠々してストロークもて之れを追ふ。ミツドルに到れば一艘身半の差、これ以上離すべからずかくて七百米にぎり掛るや我急調もて彼を追ふ。然るに如何。彼の力未だ衰へず。遂にラストヘビーに移るや、無我無中にゴールに達したるに、如何せん！ あゝは敗れたりとい。

宇和島中學 一コース 青一着 四分五十秒
彦根中學 二コース 白二着

斯くて今年も敗れたり。我等の練習も此處に到り實を結ばざりし、あゝ如何せん。我が校友の御寛恕を乞ふのみか。

- 因に本大會に於ける本校の出滑者左の如し
- 舵手 尾本市平
 - 整調 江龍謙二
 - 五番 増田善一
 - 四番 清水僞位太

劍道部報

第二十八回

青年演武大會出場之記

赤き血に燃へた六百建兒諸君の熱烈なる應援の下に吾が劍道部々員は昨年雪恥をめぐわんと決死の勇をもつて全國の猛者を網羅せる京都武徳殿に臨みたり。

二十五日奮闘せし勇士とその戦績を揚げん

- 東之部
- 十七回 本校 ○中川 豊三
- 大阪中外商業 榎 正二
- 二十三回 本校 ○山本 悌藏
- 京都同志社中學 一ノ木俊二
- 二十六回 本校 中村誠太郎

- 三番 大竹徹治
- 二番 北村綱一郎
- 一番 澤田政義
- 京都龜岡農業 齊藤 初一(棄權)
- 二十七回 本校 若原文五郎
- 京都同志社中學 中澤 好史(棄權)
- 百七十回 本校 ○集治政太郎
- 大分商業 水野 茂雄

- 西之部
- 五回 本校 ○室谷 秀治
- 京都舞鶴中學 中村 一郎
- 六回 本校 細野 善正
- 京都同志社中學 ○三宅 貫造
- 九回 本校 吉村 茂三
- 京都同志社中學 福井 敬吉(棄權)
- 六十回 本校 ○山口 彌平
- 高知商業 衣斐重三左門
- 百十三回 本校 中田 實

朝鮮龍山公立中學○堀口 誠喜
本日の試合に於いて三年生諸子の奮闘はめざましきものなりき山原は番組に姓名無く出場出来ず。
廿六日日本はいよゝ對校試合にして小雨

そはふるなかを快勝を期して出場す。

一回戦

- 本校 高知海南中學
- 山原 ○ 關
- 集治 ○ 和田
- 中川 ○ 穂岐
- 山口 ○ 松本
- 中田 ○ 横川

高知海南中學二十四點本校三十四點五分の大勝をはくす

二回戦

- 本校 三重縣宇治山田商業
- 山原 ○ 木
- 集治 ○ 伊藤
- 中川 ○ 近藤
- 山口 ○ 下村
- 中田 ○ 龜川

あゝ吾軍遂に破れたり今に至りて何をか云わん唯諸君の熱烈なる御後援を感謝し益々吾

が部の爲に努力し來るべき時をまつのみ。

滋賀縣教育會主催

第十二回武道大會出場之記

京都にて一敗したる吾々は今や懸下において覇をにぎらんと決死の勇をもつて大會に出場したり。

戦績左の如し

- 第一回戦
- 膳所中學 本校
- 先三 上 ○ 中田 一點
- 蒲生 ○ 室谷
- 小西 ○ 山口
- 小林 ○ 集治
- 奥野 ○ 山原

- 第二回戦
- 虎姫中學 本校
- 先二 森 ○ 中田 三點
- 小森 ○ 中田

- 第三回戦
- 彦根商業 本校
- 飯島 ○ 中田 一點
- 小菅 ○ 室谷
- 奥村 ○ 山口
- 羽根田 ○ 集治
- 岩島 ○ 山原
- 森 ○ 室谷
- 河合 ○ 山口
- 田中 ○ 集治
- 金森 ○ 山原

- 第四回戦
- 八幡商業 本校
- 西谷 ○ 中田 四點
- 堀尾 ○ 室谷
- 高居 ○ 山口
- 村西 ○ 集治
- 保知 ○ 山原

吾軍遂に破れたり唯山口君の全勝に善びを
つゝみて歸る。
追て諸君の熱烈なる應援を感謝す。

十月三十日彦根高等商業 學校劍道大會出場之記

一回戦 ○武儀中學 — 本校

柔道部々報

昭和二年七月十九日

於彦根工業學校開催練習試合記

第一回



嗚呼!! 我勝てり!! 又勝てり。前記二校
とも我校大將をのこし意氣揚々々勝鬨高く引
き上げたり。此の日戦士何れも獅子奮迅の勢
にて見る／＼敵を薙ぎ斃し敵を啞然たらしめ
たり。且尙我御大渡邊第二線に備へたりしも
出場せずして勝敗已に決せり、快なる哉。

大日本武徳會第二十八回出演記

昭和二年七月二十八日 於武徳殿

- 東の方 山口 隆一
 - 西の方 倉治 正良
 - 東の方 吉川 長彦
 - 西の方 宮崎農學 上野 憲吉
 - 東の方 五條中學校 大西 憲吉
 - 東の方 三田中學校 曾我 繁三
 - 東の方 京都農林 小川 治美
 - 西の方 京都農林 坪倉 藤三
 - 西の方 高鍋中學校 瀧上 二男
 - 西の方 佐賀中學校 田部 直成
 - 西の方 釜山中學校 廣瀬 申一
 - 東の方 京都第三中學校 古川 俊雄
 - 東の方 三重勸學院 渡邊 祥次郎
 - 東の方 伊藤 博生
- 一般に初舞臺の士多く日頃の技を十分に發
揮し得ざりしは遺憾であつた。來る可き日の

好成绩を望む。

明くれば二十九日愈々我々猛者五名は大阪

都島工業と戦ふ事とはなりぬ。嗚呼心地よく
戦はん。敵は如何程強くとも戦の庭の花吹雪
散らさず敵を送す可き。



嗚呼我は遂に破れたり。幸運は我に降らざ
りき、泪をのんで場を去り惶惶として宿に歸
りぬ。然かれ共彼の敵は我が對手として申分
なかりき、何故ならば、大將副將共に初段、
他は皆二級の剛勇揃ひにて、堂々たる陣立に
何事やあらん一瞬に賊窟さんず勢にて駒を進
めたりしなり、され共我將バスターを盡し火花
を散らして戦ひたるは公言するをば々からな
い。終りに先輩諸兄の吾々の爲種々御心添を

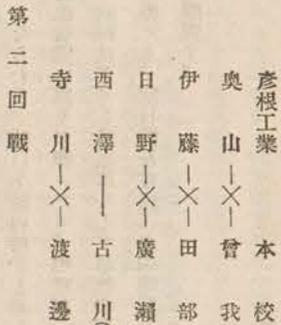
たまはつた事を深謝して擲筆する。

二・八・二〇

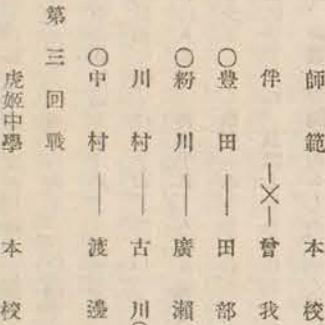
昭和二年十月二日 於神崎商業

滋賀縣教育會主催第十二回武道大會之記

第一回戦



第二回戦



第三回戦



斯くして我軍全く矛を修めて、折しも細雨
蕭々として降る内に猛烈なる長奮闘に強き疲
勞を感じつゝ静かに停車場に向ひぬ。聽て各
々功名話に花を咲かせ車上の人となりぬ。嗚
呼我軍利あらず——日頃鍛へし藥物も四回に
餘る激戦に全く刃のこぼれ落ちて……
今本誌を借りて徒に辯明するにあらざれど
當日の我が敵はいづれも縣下の群雄にして、

本大會の優勝校栗農を初めとし次で副優勝校師範又虎中等いづれも強敵にして我の大いに望みし所なり。就中二回戦師範は大將二段を初め皆初段の猛者揃ひ當大會の優勝校に數へられたりしも我軍死者ぐるひの突撃に多くの血路を切り開かれ、惜しくも栗農の月桂冠を得る事とはなりぬ。此處に我々は最善を盡くし最後まで我校の爲深く刃尖を交へし事を述べ諸兄の御寛恕を乞ふ。(柔道部一委員記)

昭和二年十一月三日

高商 近府縣柔道大會出演記

時あたかも明治節の佳辰、且体育デーの意氣ある三日、纏ては来る可き此の戦地に臥薪嘗膽せし日幾何ぞ、本年最後否五年級最後の舞臺と屈指幾年吾先輩の涙をのみて空しく金魚城下に斃れし復讐の念に必勝の意を持って参加せり、意義ある日参加せし最雄實に二十一校、洛陽の雄平安、湖南の雄滋賀師範、又京一商等々……。一回戦無事に終り二回戦神

商との戦ひに我中堅古川選手の奮戦振り實に特筆大書すべきものあり、一舉四名を斃し吾隊中の爲氣焰を上げぬ。三回戦不戦、四回戦八日市中學とはなりぬ、嗚呼!! 愈々準優勝戦に入りぬ。吾選手各々天晴亦鬼健兒の意氣を全ふせしも僅か一名の差を持つて月桂冠を彼にゆすりぬ。只惜しむらくは我々をして田部、渡邊の両闘士あらしめ能く優勝戦に入りしならむを。時に午後四時を收む、赤陽金龜城壁に照りて燦々たり。嗚呼!! 斯くして我振はざりし武道部をして最後の花を撃すを得たり。當日校友會諸子の御應援を深謝しつて謝す。

陸上競技部々報

昭和二年度陸上競技部部報
部長 寺一先生御退職後居井先生を假部長に仰ぐ

理事 長谷部先生御退職後後任なし
主將 江畑啓一郎
選手 江畑啓一郎 大橋 啓
木村 龍善 藤居 直一
南城 六郎 織田 誠一
尾本 市平 吉田 弘
飯村 天祐 上林 道
中村 正作

彦根高等商業學校主催 近府縣中等學校競技大會

不幸にして五月の不祥事に會ひ五月三十日に開催された高商主催の近府縣中等學校陸上競技大會は不参加の止むなきに至つた。

槍 投 三十七米

木村 龍善 以上

後直ちに競技に入る。

當日の我校のメンバー及び戦況左の通り。

ト ラ ッ ク 百米 大橋 啓

然し我部は後日に控へてゐる名譽ある八高主催の全國中等學校陸上競技大會を第一目標として夏期休暇を高商グラウンドを借用し、炎天下に猛練習を續けた。

終に秋風正に吹かんとする九月は近づいた新學期に入りスポーツ時季を幸に我部は火の出るやうな練習を連續した。我々は熱誠なる校友諸君の御後援御援助に報ひんま必死の覺悟で練習した。

雨の降る中で行はれたので頗るコンディション悪く、スタート頗るよきも終に第三着に終れり。

八高主催全國中等學校 陸上競技大會之記

ト ナ ッ ク 百米 十一秒七 大橋 啓
二百米 二十四秒二 大橋 啓
四百米 五十六秒 大橋 啓
八百米 二分二十秒 江畑啓一郎
千五百米 四分四十九秒 藤居 直一
一萬米 四十分フラット 藤居 直一

期待に期待せし九月十七日は来た。我等は六百の健兒に送られて九月十六日正午過ぎの上り列車にて居井先生引率のもとに名古屋に向つた。午後五時過ぎ名古屋驛に着し、驛前通りの谷屋旅館に投宿した。早速に八高グラウンドを見に行く。其の夜は一向は充分に睡を

四百米 大橋 啓
百米の直後にて、百と同じく雨中に行はれた。第一コーナーにて不幸倒れて勝運を逸す。
千五百米 藤居直一
千五百リレー 吉田、織田、江畑、尾本
一同ベストを盡せしも及ばず敗る。

フ イ ル ド 走中跳 六米一〇 南城 六郎
走高跳 一米六三 南城 六郎
一米六〇 吉田 弘
ホ・ス・ジャンプ 十二米三七 南城 六郎
棒高跳 三米三〇 南城 六郎
圓盤投 二十七米八〇 木村 龍善

夜來の雨にてコンディション頗る悪し。午前八時入場式あり。昨年の優勝校たる龍野中學より優勝旗及び優勝楯の返還あり。式

砲丸投 織田誠一
走高跳 南城六郎
南城得意の走高にて其の型の立派なるに觀衆一同驚く。終にベスト・テンに入りたれど惜しくも破れた。

走中跳 南城六郎

南城隨る自信ありて得點確實なりしもコ
ンデション悪く、三回共にフアフルに終
れり。

我等は唯ベストを盡して戦つたが天は我等
に勝運を興へず京都師範の優勝するところま
なれり。

然れども愉快に元氣よく試合に臨むことの
出来たるは八高在學中の大谷兄其の他諸先輩
の御激勵と、雨中を色々と便宜を計り下され
し御誠意に依るもの多く、まことに感謝に耐
へない次第である。

○長濱商業學校主催縣下中等學
校千六百米メドレー競走の記

十月三日我校は長濱商業主催の縣下中等學
校メドレー競走に参加せり。

我校より優勝旗返還後競技は行はれた。

當日のメンバーは古澤進、南城六郎、飯村
天祐、尾本市平の順にして、第二走者までト
ップを走りたれど、新選手飯村の努力も報ひ

られず、終に敗るるに到れり。來年を期して
我等は暫し優勝旗に離れたり。

○栗太體育研究會主催縣下中
等學校陸上競技大會參加の記

日頃鍛へし怪腕後脚を以て十月三十日栗太
郡設ケランドに於て開かるゝ縣下大會に参加
す。

居井先生に引率せられて草津に向ふ。
入場式は九時半雨中をテントの下にて行は
る。

當日のメンバー及び戦況左の通り。

百米 古川一兵衛、瀧上博

古川豫選を第三着にて通過せしも事情に

より残念乍ら第二豫選以下を棄權す。

二百米 吉田 弘

ベストに次ぐにベストを以てすれども終

に第四着にて敗る。

四百米 大橋 啓

バックストレッツチまでトップを切り居れ

ども脚筋痙攣にて棄權せり。

八百米 中村正作

千五百米 飯村天祐

一萬米 藤居直一

第十週まで三位にて進みたれど腹痛にて

棄權せり。

八百リレー (棄權)

千六百リレー (棄權)

フイールド

圓盤投 木村龍善

終にベストシックスに入りたれど惜くも

敗れて得點なし。

砲丸投 (棄權)

走中跳 (棄權)

走高跳 南城六郎

關將南城得意の走高にてバアは一跳ご

に揚りて一米五八五に及ぶ。實に昨年の

記録を破りて第一位を得、五點を獲る。

雨中に於て出でし當大會最初の新記録な

り。

棒高跳 南城六郎

後援を賜はらん事を願ひます。

〔附記〕

我部は春には南城六郎君を名古屋に派遣し
東海大會に優勝を得、更に秋には明治神宮に
於て開催せられたる全國競技大會に参加せし

め絶大の榮譽を得た。又更に進んで十一月

大阪に開かれたる近畿中等學校競技大會に同

君を派遣し棒高跳に一點半を得たる誠に我校

運動部最大の榮譽と喜び居る次第であります

以 上

庭球部々報

- | | |
|----|----------------|
| 部長 | 中川 先生 |
| 理事 | 野間 先生 杉本 先生 |
| 委員 | 五年 宮川 宇平 林 俊雄 |
| | 四年 西川 英吉 |
| 選手 | 三年 長谷川篤二 兒玉 正三 |
| | 五年 毛利 好輝 |

七百の諸士よ！ 思へ！！
あの四高仙石原頭に於ける全國中等學校庭
球大會を。何たる悲壯の極壯烈の極みにはあ
らずや。

諸子は聞かざりしか。春尙寒き頃金龜ケ森
に呼魂せし我が熱血男子の雄叫びを。

諸子は見ざりしか。炎熱燃ゆが如き熾熱の

日金龜ケ丘に迷る我が熱腸男子の血と涙とを

されど何たる悲慘。優勝戦に於てあたら和

歌山に勝をゆづらんとは。眞夏の太陽が仙石

原頭を血潮に染めし時大自然の沈黙を破りて

仙石壘の空高く凱歌は轟き渡りたり。我等は

相擁して慟哭せり。凄慘極りなき血涙に非ず

して何ぞ。オム恨は長し。

満たし得ざりし征服慾の淋しさを抱きつゝ

吾部は今新なる準備を急げり。されど仙石原

〔未記〕

今年度の競技部史上を顧みて見るに其の敗
慘の跡の餘りに大きくして多くあるを見るに
及んで我部は誠に残念に思ひ一層の責任を感
ずる次第であります。寛大なる六百の健兒諸
君よ我等の意中を察して御海容あらんことを
新春以來の諸大會は全部雨天にて悪戦苦闘
し尊き經驗を得たるは不幸中の幸ならんと自
ら慰めつゝあり。

來年度選手諸君の活躍を祈り一層自重せら

れんことを希み、重ねて校友諸兄の一層の御

部 報

部 報

部 報

部 報

部 報

部 報

部 報

部 報

部 報

部 報

部 報

部 報

部 報